

# つれづれ草

けんちく

和の住宅に畳は必須なんだろうか？そんなことを考えて、畳のことを調べました。手持ちの書籍を調べるだけの、にわか勉強であることはご容赦を。

畳の起源については、2種類の説がありました。「皮や布、むしろなど薄い敷物のことで、不用のときはたたんで持ち運べるものだった。」※1、「奈良時代に『板敷』といわれていたように板を敷きつめて、その上に座るときは草で編んだ座具が用いられた。平常はたたんでおくのでタタミといわれ、これが『畳』の起源だとされている。」※2など、畳とは薄い敷物のことでたたむことから「タタミ」というのだという説※3。そして、「畳」は敷物全般を指し、その中でも特に幾重にもたたみ重ねたもの※4、「薄い敷物の素材（菅、獣皮、布など）を幾枚か重ねて刺してつくった敷物のことで、『重ねる』『厚い』の意味がある『畳』が当てられたのである。」※5、「布や皮、あるいは筵のような薄い物を何枚か重ねて縫い合わせ、それを敷物にした物を畳と呼んでいたようである。」※6にあるように、薄い物を重ねたものが「畳」であるという説。いずれにしても、土間と板敷の床からなる日本の住まいの床に、状況に応じて敷かれる「しつらい」のための調度品であり、座具であり、寝具であった、ということのようです。そして、使う人の身分によって、かなり厳格にその仕様や用法が決まっていたそうです。・・・しかしそれなら、やはり畳は必須ではなく、板敷の間だって和室じゃないか。しかし、ご存じの通り、中世になると書

院造の発展とともに畳は敷きつめられるようになり、座敷において座敷飾りと畳はセットで必須であり、書院造や数寄屋建築を和の住まいの原型だとすると、畳が敷きつめられているのが和室ということになるのでしょうか。

結論から言うと、私は、畳はやはり和の住まいに必須かな、と（今は）思っているのですが、その最も大きな理由は実は書院造ではありません。寸法です。十寸で一尺という中国由来の寸法単位に、一間二六尺という寸法単位が割り込んでいますが、「間」という単位は中国にはなく、日本オリジナルなのだそうです。そして「間」こそが、畳の大きさです。そもそも一間が六尺と定まったのは明治時代で、古代では十尺から七尺の間でばらつきがあったそうですが、地域によって畳の大きさが違うのですから当然です。住まいにおいては「間」という「畳モジュール」が使用され、それは和の居住文化にかかわる日本人の様々な立ち居振る舞いに最適な寸法となっています。そして、「生活空間だけでなく、生産者にとっても都合のよい寸法なのです」※7。畳の大きさを基準として日本の住まいは作られる。さらに、畳は長さだけでなく広さの基準にもなります。八畳の間がどのくらいのおおきさか、私たちは知っている（世代によりませんが）。和室が一室もないマンションの住戸の、畳が絶対敷けそうにない狭い室にも「4.0畳」と書いてある。長さと同様に耳っているのが畳なら、やはり必須と言わざるを得ないのではないかと感じるよう

になりました。

洋風の空間にとってつけたような和室がしつらえてある場合があるのですが、そんな場合も、せめて寸法だけは「畳モジュール」を感じる空間であって欲しいと思います。

※1 清家清監修『すまいの歳時記―伝承の暮らしとつらい―』講談社、1985

※2 西山卯三『すまいる考今学 現代日本住宅史』彰国社、1989

※3 他にも『日本人とすまい①靴脱ぎ』リビングデザインセンターOZONE、1996など。

※4 平井ゆか唯『無二の畳』和室学』平凡社、2020

※5 中川武『日本の家 空間・記憶・言葉』TOTOTO出版、2002

※6 本間博文・畑聰一編著『すまいる論』放送大学教育振興会、2010

※7 内田祥哉『日本の伝統建築の構法 柔軟性と寿命』2009

## 畳の必然性

かも・みどり

京都大学大学院

工学研究科建築学専攻博士課程修了

博士(工学)・一級建築士

(一社)京都府建築士会 代議員

大阪ガス株(エネルギー)文化研究所 主席研究員

大阪商業大学 非常勤講師